

中晩唐における「期不至」詩の展開

―園林などにおける詩人の交遊と詩作を中心に―

紺 野 達 也

一 はじめに

莊園や庭園、別荘などを指す「園林」は中國における詩歌創作の場のなかでも重要なものの一つである。ただし、これらの詩歌の全てが園林の内部で作られていたわけではない。園林の景觀や生活に對する憧憬や追憶など、外側から園林を歌った作品も含まれる。

ところで、園林やそれに類する景勝地で作られた詩には「期不至」という作品、すなわち「友人」と園林で會う約束したもの⁽¹⁾、その友人が來ないことを歌う一連の作品がある。園林などにおける詩人間の交流を反映したこれらの作品の發生から盛唐期までの情況については前稿において既に検討している。本稿はそれを承けて、中晩唐期における「期不至」詩について論じたい。前稿で述べたように、園林などの内部で作られる

「期不至」詩に對して、盛唐期には外部で作られる答詩が登場した。それでは、そのような新たな情況を迎えた「期不至」詩はさらにどのように展開したのだろうか。この問題を検討することで、中唐・晩唐という時代における園林などでの詩人の交流と詩作が具體的に見えてくると思われる。

二 盛唐期までの情況

中晩唐期における「期不至」詩の展開を見る前に、注(1)にあげる前稿で論じた盛唐期までの情況を再度、確認しておきたい。

先行研究が指摘するように「友人」と會う約束したものの、その友が來ない」という内容を歌う詩は東晉の謝混に始まり、謝靈運が繼承した。彼らの作品はいずれも『文選』に收録されたが、六朝期、後續の作品が生まれることはなかった。

しかし、初唐の宋之問は佛教の僧侶を招いたものの、その僧侶が來ないことを述べる詩を詠んでおり、その詩題にはその僧侶の名が明示されていた。このように相手の名をはっきりと記すことは六朝には見られなかった重要な特徴である。盛唐期になると、名前が記される相手は佛僧からその他の人々にも廣がった。すなわち、この時期に至って「期不至」詩は「記名性」を獲得し、さらにその結果として「期不至」詩は定型化、一般化していった。

このような定型化・一般化の過程で、「期不至」詩には約束を違えた相手からの答詩が生まれた。その最も初期の詩こそ、王維の「待儲光羲不至」とそれに對する儲光羲の「答王十三維」である。そして、このような「答詩」の誕生は、實際にはともに園林や景勝地を鑑賞・遊覽することがかなわない場合であっても、その園林や景勝地の實景を歌う「期不至」詩と園林などの風景を想像する唱和詩という形で、詩を介した交遊が可能になったことを意味している。

三 中晚唐期の情況 1 繼承

「期不至」詩は中晚唐期にも引き續き創作された。中唐前期、大曆十才子の一人である盧綸は次のように歌う。

藍溪期蕭道士採藥不至（『全唐詩』⁽³⁾二七八）

藍溪にて蕭道士と藥を採るを期すも至らず

春風生百藥 春風 百藥を生じ

幾處朮苗香 幾れの處か 朮苗香る

人遠花空落 人遠くして 花空しく落ち

溪深日復長 溪深くして 日復た長し

病多知藥性 病多くして 藥性を知り

老近憶仙方 老近くして 仙方を憶う

清節何由見 清節 何に由りてか見る

三山桂自芳 三山 桂自から芳し

この詩は詩題に「藍溪」という場所、「蕭道士」という約束した相手を明示し、風景表現を描く點で、盛唐に確立した「期不至」詩の様式を繼承した作品であると言えよう。

ここでは領聯の敘景に注目したい。これは長安東南の藍溪（藍水）の景觀を描寫したものである。この藍溪が嚴密な意味で園林に該當するか否かはなお疑問が残るものの、長安東南の行樂地、景勝地ということではできるだろう。そして、盧綸は一人で遊覽、鑑賞したその景觀を彼の求道のための藥草の採取にふさわしい場、より正確に言えば俗世と離れた、仙界に近い場所として描いている。こういった景觀描寫は（盧綸の求道が眞實のものかどうかはともかく）蕭道士とこの地で藥を採る約束をしたということによって擔保されているといつてよい。⁽⁴⁾

盧綸詩のように、宗教者と約束して待つものの、相手が訪れないことを詠む作品は他にも存在する。⁽⁵⁾ 中唐の詩僧、皎然の「妙喜寺高房期靈澈上人不至重招之一首」(『唐』八一五)はおそらく園林的施設を備えている妙喜寺の高房の様子を

……

如今誰山下、秋霖步漸瀝。吾亦聊自得、行禪荷輕策。
松聲暢幽情、山意導遐跡。舉目無世人、題詩足奇石。
貧山何所有、特此邀來客。

と歌う。つまり、皎然は靈澈上人その人がいなくとも、こういった妙喜寺の高房の景觀を遊覽、鑑賞し、それを詩歌として表現している。さらに「目を舉げて世人無し」という表現から、皎然はこの山中の寺院の景觀を俗世と對置して考えていることが窺える。同じく「勞山憶棲霞寺道素上人久期不至」(『唐』八一五)にも

遠寺蕭蕭獨坐心、山情自得趣何深。
泉聲稍滴芙蓉漏、月影纔分鸚鵡林。
滿地雲輕長礙屣、繞松風近每吹襟。

……

中晩唐における「期不至」詩の展開(紺野)

とあり、佛僧を招くにふさわしい、脱俗の地⁽⁶⁾としての勞山の景觀を歌う。この景觀もまた、皎然がひとりで遊覽、鑑賞したものである。

これらの「期不至」詩はいずれも道士や佛僧といった宗教者との約束が果たされないことを詠む。したがって、當初彼等と會うことを約束したものの、結果として詩人一人が遊覽、鑑賞することとなった園林や景勝地の景觀も必然的に清澄なものとして描かれることになる。

一方、おそらくそういった宗教者を待つものではない作品も存在する。中唐・李益の「合源溪期張計不至」(『唐』二八二)は次のように述べる。

霜露肅時序、緬然方獨尋。暗溪遲仙侶、寒澗聞松禽。
寂歷茲夜永、清明秋序深。微波澹澄夕、煙景含虛林。
素志久淪否、幽懷方自吟。

この詩に歌われる合源溪や約束した相手である張計(仙侶とはいうものの、おそらく宗教者ではない)については未詳であり、具體的な情況はわからないが、やはり約束した相手および約束した場所を明確に示した作品、すなわち「期不至」詩の様式にもとづいた作品である。

注目すべき點は、「期不至」詩の様式にしたがって描かれた

合源溪の景觀である。この詩では合源溪という景勝地の秋の夕刻から夜の景觀が清冽、靜謐なものとして描かれている。このような景觀描寫は、張計が違約し、李益が一人、この地を遊覽したことによって成り立っていると考えられる。そもそも、違約による張計の不在は「獨尋」や「虛林」などの語に明らかのように李益を孤獨な情況に置くこととなった。その結果、李益は合源溪の景觀が他者の存在しない、清冽、靜謐な空間であると感じ、それを詩によって描寫したと言えよう。

また、李端の「山中期張芬不至」(『唐』二八五)は、

石堤春草碧、雙燕向西飛。悵望雲天暮、佳人何處歸。

藥欄蟲網遍、苔井水痕稀。誰道嵇康懶、山中自掩扉。

と歌う。詩題にいう山中の具體的位置ははっきりしないが、末句の「自ら扉を掩う」という表現に基づけば、李端の所有する居室もしくは別業の所在地であると見てよい。また頸聯の「藥欄蟲網遍く、苔井水痕稀なり」からは、ここが「藥欄」すなわち花壇などのような園林的空間を備えている場であることが確認されよう。ところで、この頸聯は張芬も含めて人の訪れがない、俗世間から離れた場であることを示している。さらにそれを承けて「誰か道う 嵇康懶しと」と述べ、世事に頓着しない李端の姿が表現されている。このように考えた場合、「期不

至」詩の様式を用いて園林的の景觀を表現することによって、ここが世俗から離れた存在であることを示している點は特に注目されよう。

次の皎然の「春夜期裴都曹濟集心上人院不至」(『唐』八一六)は 地方官の裴濟との約束が果たされなかったことをいう。

東林期隱吏、日月爲虛盈。遠望浮雲隔、空憐定水清。
逍遙方外侶、荏苒府中情。漸聽寒鞞發、淵淵在郡城。

この詩は心上人(不詳)の寺院において裴濟を待ったものである。この詩の頷聯の表現、とりわけ「漸」によって清澄となった心を意味する「定水清し」、そして裴濟がまだ州の役所にあることを示している「府中の情」といった表現から、この寺院が清浄な場であること、特に裴濟の活動據點であり、俗世間を代表する官界とは對蹠的な存在として歌われていることは明らかであろう。

晩唐・杜牧の「秋晚與沈十七舍人期游樊川不至」(『唐』五二一)も長安南郊の樊川にあった自らの別業「樊水園」において沈詢とともに遊覽する約束をしたものの、それが叶えられなかったことを述べる。

邀侶以官解 侶を邀えんとするも 官を以て解かれ

泛然成獨遊 泛然として 獨遊を成す
 川光初媚日 川光 初めて日に媚しく
 山色正矜秋 山色 正に秋を矜かなり
 野竹疏還密 野竹 疏らに還た密く
 巖泉咽復流 巖泉 咽び復た流る
 杜村連滴水 杜村 滴水に連なり
 晚步見垂鉤 晚步 垂鉤を見る

この詩も「期不至」詩の様式にしたがって作られた典型的な作品であり、そのため頷聯以下では園林の秋の景觀が歌われる。特に末句の「垂鉤」の意味する釣人は「悠々自適者」¹⁰を象徴しており、その釣人が現れる園林を所有する杜牧自身は隱棲者でないにせよ、それに近い、あるいは親近感を寄せる存在であると言える。このような樊水園の景觀を考える上で、沈詢が公務を理由に違約したことはやはり重要な意味を持つ。なぜならば、公務で遊覽することができない人物を描くことで、この杜村の別荘が官界と遠く離れた、脱俗的世界であることを表現し得たからである。¹¹

皎然や杜牧の詩のように公務のために約束した相手が來ないことを歌う作品は盛唐期にも確認される。それでは、次の李商隱の「十字水期韋潘侍御同年不至、時韋寓居水次、故郭鄆寧宅」詩（唐）五四〇）はどのように考えれば良いのだろうか。

中晩唐における「期不至」詩の展開（紺野）

伊水濺濺相背流 伊水 濺濺 相い背流し
 朱欄畫閣幾人游 朱欄 畫閣 幾人か遊ぶ
 漆燈夜照眞無數 漆燈 夜照して 眞に數無く
 蠟炬晨炊竟未休 蠟炬 晨炊きて 竟に未だ休まず
 顧我有懷同大夢 我を顧みるに懷い有るも大夢に同じく
 期君不至更沉憂 君と期すも至らず 更に沉憂
 西園碧樹今誰主 西園の碧樹 今誰か主とす
 與近高窗臥聽秋 與に高窗に近づきて臥して秋を聽く

この詩に表現された伊水と洛水の合流點である「十字水」の景觀は、皎然や杜牧の詩のように脱俗的なものではない。李商隱にとって、その景觀は「朱欄」や「畫閣」に代表されるかつての榮華をすでに失っている。

しかし、「十字水」、そして現在、韋潘の假寓する居宅の園林である「西園」は遊覽にふさわしい場所であるという認識——これはおそらく李商隱、そして韋潘に共通するものである——がこの詩の前提となっていることを見逃すべきではない。第六句が述べるように、もし、侍御史の官にある韋潘が違約することなく、李商隱とともに遊覽していたならば、時間の推移とそれに伴う事物の榮枯盛衰に對する李商隱の悲哀は少なくともこの詩に表現されているもの以上に増幅することにはなかっただろう。つまり、「十字水」という景勝地やその地にある園林「西園」

に韋潘がいなかったことで、李商隱の目にはそれらの景觀がより荒涼としたものに映ったのではないだろうか。そしてこのような推論が妥當であるとすれば、この詩における悲哀や荒涼感も友の不在の景觀を描く「期不至」詩を用いることによって表現が可能となったといえよう。

いずれにせよ、これらの作品の詩題には友人など、會うことを約束した相手と場所が基本的に明示され、また詩中にはその相手がいない場所の景觀が表現されている。前稿でも述べたように、この様式、特に詩題において相手の名前や約束した場所を特定することは、「期不至」という詩が陳腐なものになってしまうことを避けるためのものであった。そして、中晩唐期の「期不至」詩もこの盛唐期に確立した「期不至」詩の様式を繼承していると言えよう。

しかし、ここで一つの疑問が想定できよう。それはたとえ約束した相手の名前や場所を詩題に明示したとしても作例が増えてしまえば、その特殊な題材ゆえに結局は陳腐なものになってしまうのではないか、ということである。このように考えた場合、晩唐の李商隱が相手の来ない場所を脱俗的世界として描くという「傳統」にあえてしたがわず、榮華の失われた景觀として表現したのは陳腐化を避ける一つの試みであったといえないだろうか。

四 中晩唐期の情況 2 短詩型化

前章では、盛唐期に確立した「期不至」詩の様式を基本的には繼承した作品について考察した。しかし、李商隱のように新たな試みを行う作品があることも明らかになった。

中晩唐期における「期不至」詩の短詩型化も新たな展開の一つと言ってよからう。短詩型化とはすなわち、絶句形式を中心とした一首四句からなる「期不至」詩の發生である。盛唐期では張萬頃の「東谿待蘇戶曹不至」(《唐》二〇二)の(七言)六句というものが最も短く、それ以外では律詩型式が最短であった。しかし、中晩唐には五言絶句・七言絶句を中心とした短詩型の「期不至」詩が登場する。

現存する作品で最初に現れる短詩型の「期不至」詩は、中唐前期の韋應物の「同德閣期元侍御・李博士不至各投贈二首」(《唐》一八七。其一の「應」はもと「因」に作る)である。

庭樹忽已暗	庭樹	忽として已に暗し
故人那不來	故人	那ぞ來たらざる
祇應厭煩暑	祇だ應に煩暑を厭い	
永日坐霜臺	永日	霜臺に坐すべし

官榮多所繫 官榮 繫ぐ所多く

(其二)

閑居亦愆期 閑居も亦た期を愆つ
 高閣猶相望 高閣 猶お相い望めば
 青山欲暮時 青山 暮れんと欲する時

(其二)

この詩は韋應物が洛陽城内景行里の同德寺の高閣に隠棲していた時期の作品であり、庭園および外の風景を望みつつ、約束していた元侍御と李博士が訪れないことを歌う。ただし、絶句二首からなる作品とはいえ、一つの作品とみなせば盛唐期の作品と同量であるともみならずとも可能である。少なくとも、完全な短詩型の作品というにはやや困難であろう。しかし、これまでは律詩もしくはそれ以上の分量を持つ古體詩で歌われることがほとんどだった「期不至」詩が絶句でも歌われるようになったのは畫期的ではなからうか。さらに、同じ韋應物が同族である韋滌・韋武に贈った「西郊期滌・武不至、書示」(『唐』一八七)は次のように歌う。

山高鳴過雨 山高くして 過雨鳴り
 澗樹落殘花 澗樹 殘花落つ
 非關春不待 春の待たざるに關するに非ず
 當由期自賒 當に期の自から賒きに由るべし

中晚唐における「期不至」詩の展開(紺野)

長安の西郊の善福精舎において晚春の景觀を詠んだこの詩は、完全な絶句形式の「期不至」詩のなかで現存する最も早い作品である。このように中唐前期の段階で「期不至」詩の短詩型化の試みが開始されたことは注目値する。

韋應物の詩は五言で詠まれたが、これ以降、七言の絶句形式もしくは一首四句形式の「期不至」詩が繼續的に歌われる。

期王鍊師不至 秦系(『唐』二六〇)

黃精蒸罷洗瓊杯、林下從留石上苔。

昨日圍棋未終局、多乘白鶴下山來。

九月十日雨中過張伯佳、期柳鎮未至、以詩招之 李益

(『唐』二八三)

柳吳興近無消息、張長公貧苦寂寥。

唯有角巾霑雨至、手持殘菊向西招。

夜後把火看花南園、招李十一兵曹不至、呈座上諸公

呂溫(『唐』三七二)

夭桃紅燭正相鮮、傲吏閑齋困獨眠。

應是夢中飛作蝶、悠揚只在此花前。

西白溪期裴方舟不至 皎然(『唐』一八五)

中國詩文論叢 第三十二集

望君不見復何情、野草閒雲處處生。
應向秦時武陵路、花閒寂歷一人行。

期李二十文略・王十八質夫不至、獨宿仙遊寺 白居易

〔唐〕四三六

文略也從牽吏役、質夫何故戀囂塵。
始知解愛山中宿、千萬人中無一人。

期不至 白居易〔唐〕四四一

紅燭清樽久延佇、出門入門天欲曙。
星稀月落竟不來、煙柳朧朧鵲飛去。

期宿客不至 白居易〔唐〕四五〇

風飄雨灑簾帷故、竹映松遮燈火深。
宿客不來嫌冷落、一尊酒對一張琴。

夜期友生不至 姚合〔唐〕五〇一

忍寒停酒待君來、酒作凌澌火作灰。
半夜出門重立望、月明先自下高臺。

夜期嘯客不至 賈島〔唐〕五七四

逸人期宿石牀中、遣我開扉對晚空。

不知何處嘯秋月、閒著松門一夜風。

寒夜文諶潤卿有期不至 皮日休〔唐〕六一五

草堂虛灑待高眞、不意清齋避世塵。
料得焚香無別事、存心應降月夫人。

これらの「期不至」詩には、絶句もしくは一首四句という短詩型によって作られているという事實それ自體の他にも重要な特徴がある。それは、約束した場所を明記しない作品が多いことである。では、なぜ明記しないのか。その理由として園林を備える詩人の居宅で作られた作品であるということが想定される。このように詩人の居宅で作られたために約束の場所が記されない詩そのものは、前稿でも確認したように、盛唐期でも王维と杜甫に一首づつ見られた。しかし、そのような詩が中唐期以降に増加し、それも従前の「期不至」詩にはなかった七言絶句の作品に集中する點は注目されよう。

そもそも、なぜ、中唐期において絶句形式の「期不至」詩が登場したのだろうか。その主な理由の一つには絶句、とりわけ七言絶句の持つ絶句性⁽¹⁶⁾にあると考えられる。「期不至」詩では、たとえば、

「友人と約束する」↓「友人を待つが来ない」↓「友人を

待つ場の景観とそれに對する感懷

といったように、時系列や素材が單一的に並ぶことが多い（ただし、その順番は作品によって異なる）。また「友を待つ心情を歌う」、あるいは（作品の主眼自體はそこになかったとしても）そのような心情が前提となる「期不至」詩においては、（たとえ一種の社交儀禮であつたとしても）その思慕の情を強く訴えることが求められたらう。それにあたつては「單一性―偏在性―對他性」といった絶句性を持つ絶句形式が適當であると判断されたと考えられる。「期不至」詩において、中唐以降、絶句性のとりわけ強い七言絶句が多數用いられたのは、五言から七言へという時代全體の傾向があるにせよ、むしろ當然であつたのではないだろうか。

しかし、それではなぜ、中唐に至るまで絶句形式、あるいはそれに準じる「期不至」詩が現れなかったのだろうか。その理由として盛唐期の「期不至」詩の様式化があげられる。既に述べたように、「期不至」詩は詩題において約束した相手の名前を明示し、さらには基本的に約束した場所をも記すようになった。また、六朝の謝混・謝靈運以來、「期不至」詩はその約束した相手が來ない場所の景観を描寫するために、ほとんどの場合、律詩もしくはそれ以上の長編詩によって作られてきた。盛唐期にこれらの様式が確立し、安定したものとなつていた。そ

中晩唐における「期不至」詩の展開（紺野）

れゆえ、前章でも確認したように、中晩唐においても基本的にはその様式を崩さない作品が生まれたのである。しかし、一方でその様式が安定しており、かつ「友」と會う約束したものの、その友が來ない」という特殊な題材である以上、發想や表現が同工異曲あるいは陳腐なものに陥る可能性がある。その結果、これまでの様式とは異なる作品を求めようとしたと考えられる。このように考えてはじめて、韋應物の試みの重要性が理解できよう。なぜならば、詩型の變化は様式に對する新たな試みが行われたことを最も顯著に示せるからである。そして、その後も五言から七言という變化を加えて、絶句形式による「期不至」詩が作られていった。さらに、絶句形式という新しい方法で歌うにあたり、約束した場所を明示しなくともよい作品、すなわち自身の居宅における詩が多く作られていったと考えられる。

五 中晩唐期の情況 3 唱和

中晩唐期における「期不至」詩の新たな展開について、もう一つ注目すべきことがある。それは「期不至」詩をめぐる唱和詩に新たな情況が生じたということである。

第二章でも言及したように、盛唐期に約束した相手の名前を記すという様式が確立されたことで、「期不至」詩に違約した側からの答詩が生まれた。それが王維の詩に對する儲光羲の唱

中國詩文論叢 第三十二集

和詩である。

王維と儲光羲の作品は當事者間の詩歌の應酬であつた。それでは次にあげる中唐・皇甫冉の「酬崔侍御期籍道士不至兼寄」⁽¹⁸⁾〔唐〕二五〇〕詩はどのように考えればよいのだろうか。

一心求妙道	一心	妙道を求め
幾歲候眞師	幾歲	眞師を求む
丹灶今何在	丹灶	今何くにか在る
白雲無定期	白雲	定まる期無し
崑崙煙景絶	崑崙	煙景絶え
汗漫往還遲	汗漫	往還遅し
君但焚香待	君但	だ香を焚きて待つ
人間到有時	人間	時有るに到る

この詩は、崔侍御なる人物が籍道士と約束したものの、その道士が來ないことを歌い、あわせてその詩を皇甫冉に贈つたものに對する唱和の作である。原詩が傳世しないため、詳細は未詳だが、崔侍御は何らかの理由で皇甫冉に詩を贈つたと考えられる。いづれにせよ、「期不至」詩が第三者にも贈られ、またそれに對する應酬があつた點で注目されよう。

そして、完全な意味で、約束の當事者以外の第三者による唱和が見られるのは、前掲の白居易の「期宿客不至」である。

風飄雨灑簾帷故	風飄り	雨灑ぎて	簾帷故し
竹映松遮燈火深	竹映え	松遮りて	燈火深し
宿客不來嫌冷落	宿客來らず	冷落を嫌わん	
一尊酒對一張琴	一尊の酒は對す	一張の琴	

この詩は大和四年（八三〇）に洛陽の履道里にあつた白居易邸で作られたと考えられる。したがって、前半は白居易邸にあつた園林の風景を描いていると見てよい。⁽¹⁹⁾この白居易詩に對し、徐凝が次韻している。それが「和侍郎邀宿不至」〔唐〕四七四〕である。

蟾蜍有色門應鎖	蟾蜍色有り	門應に鎖すべし
街鼓無聲夜自深	街鼓聲無く	夜自から深し
料得白家詩思苦	料り得たり	白家 詩思苦しきを
一篇詩了一彈琴	一篇の詩了れば	一彈の琴

この徐凝の詩は、當時、⁽²⁰⁾第三者が「期不至」詩に唱和するようになったことを示している。當然、その前提には、崔侍御や白居易のように本來、約束の當事者の個人的情況を歌うはずの「期不至」詩が第三者にも送られるようになったという事實がある。

とりわけ注目されるのは、徐詩の前半の敘景だろう。徐詩の表現自体は夜の景觀を描いたものとしては平凡であり、奇抜とは言えない。しかし、この表現は當日、履道里にはいなかった徐凝（言うまでもなく、白詩のいう「宿客」でもない）が白居易から贈られた詩を踏まえて想像したものであり、觸目によるものではないということが重要であると思われる。つまり、「期不至」詩における第三者による唱和詩の誕生は、盛唐期の儲光義の答詩と同様、實際に園林や景勝地にいなくとも、想像という形でその景觀を歌うことを可能にしたのである。さらに言えば、このような第三者による唱和という方法は園林や景勝地を歌う詩を増加させ、そして園林や景勝地に對する表現をより多様なものにする可能性を孕んでいると言える。

次に姚合・馬戴・賈島の唱和詩について考えてみたい。姚合の「喜馬戴冬夜見過期無可上人不至」（『唐』五〇一。もと二首あるが、其二は馬戴の詩である）は馬戴が姚合のもとを訪れたおり、同じく來訪することを約束していた詩僧の無可が來なかつたことを歌う。

客來初夜裏 客は來る 初夜の裏
藥酒自開封 藥酒 自ら封を開きく
老漸多歸思 老いて漸く歸思多く
貧惟長病容 貧しくして惟だ病容長し

中晩唐における「期不至」詩の展開（紺野）

苦寒燈焰細 寒に苦しみて 燈焰細く
近曉鼓聲重 曉に近くして 鼓聲重し
僧可還相捨 僧可 還た相い捨て
深居閉古松 深居 古松に閉ざす

この詩には姚合の老貧とともに、居宅の侘しさが描かれている。しかし、次の馬戴詩の詩題「集宿姚殿中宅期僧無可不至」（『唐』五五六）が示すように、大和二年冬から大和四年初春にかけて、姚合は殿中侍御史の地位にあった。そうだとすれば、客觀的に言って、その居宅は決して侘しいものではなかっただろう。つまり、この詩はいわゆる武功體の典型的作品なのである。⁽²¹⁾ それでは、馬戴はどのようにこの姚合の居宅を詠んでいるのだろうか。

殿中日相命 殿中日び相い命じ
開尊話舊時 尊を開き 舊時を語る
餘鐘催鳥絕 餘鐘 鳥の絶ゆるを催し
積雪阻僧期 積雪 僧の期するを阻む
林靜寒光遠 林靜かにして 寒光遠く
天陰曙色遲 天陰りて 曙色遅し
今夕復何夕 今夕 復た何の夕ぞ
人謁去難追 人謁して 去れば追ひ難し

中國詩文論叢 第三十二集

姚合の居宅の園林の風景はこの馬詩の頸聯に歌われている。その靜謐・沈鬱な描寫はやはり武功體の手法を採用していると考えられる。次に引く賈島の「夜集姚合宅期可公不至」〔唐〕五七三も軌を一にしているといつてよからう。

公堂秋雨夜、已是念園林。何事疾病日、重論山水心。

孤燈明臘後、微雪下更深。釋子乖來約、泉西寒磬音。

この三首が述べるように、姚合主催の詩會にその「詩集團」の中心的人物の一人である無可は來訪しなかったのだらう。しかし、この詩會には姚合・馬戴・賈島が揃い、姚合の詩題にも「喜馬戴冬夜見過」という。また、注(21)の先行研究が指摘するように、姚合を中心とする武功體の描寫は決して事實そのものではない。したがって、この詩會が行われた姚合の居宅、およびそこに備えられた園林は詩中の表現とは異なり、實際には、決して孤獨・寂寥なものではなかったはずである。

この時、彼等が友と約束したが來ないという「期不至」という題材を採用したことにより、武功體としてのこれらの詩の敘景および抒情はいっそう効果的なものになったのではなからうか。そう考えられる理由は二つある。第一に、「期不至」詩として歌うことによって、實際には長安の朝官の住宅である姚合の住居を宗教者である佛僧の無可を招くに「ふさわしい」場所

として表現することが可能となったからである。第二に、「期不至」詩という形で歌うことで、複数の参加者がいたにもかかわらず、無可が在席していないか事態が前面に現れ、場の孤獨や寂寥を明確に示し得たからである。

一方、「期不至」詩の展開を考える上でも、この三人の詩は重要な意味を持つ。そもそも「期不至」詩は、それが誕生した六朝期以降、基本的には違約された側が園林や景勝地、あるいは自らの居宅に一人いることを歌う詩であった。したがって、そこに第三者が介入する余地はなかったのである。とりわけ、違約された側、すなわち詩作をする人間は一人である必要があった。しかし、姚合が主宰したような詩會における集團制作を通して、「期不至」詩は同時に複数作られることが可能になったのである。

そして、白居易の詩に對する徐凝の作品のように第三者の唱和詩が生まれたことと姚合等の詩のように詩會において複数の「期不至」詩が作られ始めたことがほぼ同時期であったのは、おそらく偶然ではない。そもそも盛唐期に相手の名前を記すことが「期不至」詩の様式として確立し、それによって、違約した側の答詩という形で、「期不至」に對する唱和詩が誕生したところが、既に述べたように、特殊な題材であり、かつ安定した様式を持つがゆえに、「期不至」詩は陳腐なものになりにかねず、それを避けるために新たな試みが必要だった。その新しい

試みの一例こそ、このような「期不至」詩に對する第三者の唱和詩、および詩會の参加者による「期不至」詩の同時的かつ集團的な創作であった。そして、これらは盛唐期に確立した「期不至」の様式を發展させたものであり、また中唐以降の詩人集團の形成、それに伴う詩作の交往のなかで生まれたものであったのである。

このように「期不至」詩とそれに對する唱和の展開を見たと、前章で引用した唐末・皮日休の「寒夜文讌潤卿有期不至」詩も同様の作品として位置づけられるだろう。皮日休は彼の草堂において潤卿、すなわち張賁と「文宴」を開くことを約束したものの、張賁は訪れなかった。このことを詠んだ皮日休の詩をもとに、親友の陸龜蒙が「和襲美寒夜文讌潤卿有期不至」〔唐〕六二八が歌う他、鄭璧も「文燕潤卿不至」詩〔唐〕六三二によって唱和している。そして、文宴という性格や皮陸の親密な關係を考えれば、この文宴に陸龜蒙、さらには鄭璧が参加していた可能性は多いにあると言えよう。

六 結語

本稿は中晩唐期における「期不至」詩について検討した。その結果については、次のようにまとめることができるだろう。

①約束した相手の名前および會う予定だった場所を基本的に

中晩唐における「期不至」詩の展開（紺野）

詩題に明記し、その場所の景觀を表現することが盛唐期に「期不至」詩における安定した様式として確立した。それゆえ、中晩唐においてもその様式を繼承する作品が創作されていた。

②しかし、特殊な題材を歌い、かつ安定した様式を持つ「期不至」詩は、それゆえに陳腐なものとなってしまうおそれがあった。それを避けるために従来は見られなかった新たな試みが行われた。

③その新たな試みの一つが、絶句形式による「期不至」詩である。

④「期不至」詩に對する第三者による唱和詩の創作および詩會における「期不至」詩の同時的かつ集團的な創作も新たな試みとみなすことができる。

このように考えた場合、第四章で見てきた絶句形式の作品には注目される詩がある。それは約束した相手を「宿客」、「友生」、「嘯客」と曖昧にする作品である。絶句形式の詩以外にも、白居易の「城上對月期友人不至」〔唐〕四三三、晚唐・許渾の「月夜期友人不至」〔唐〕五三二、同じく晚唐の崔塗の「題興善寺隋松院與人期不至」〔唐〕六七九、晚唐の女流詩人である魚玄機「期友人阻雨不至」〔唐〕八〇四が確認される。こういった相手の名前を特定しない詩歌は形式からいえば「期不

至」詩の祖形である六朝期の作品に類似する。しかし、実際には、盛唐期に確立した様式に對する試みの一つと見るのが正確であろう。

中唐以降、作詩層の擴大にともなうて園林や景勝地における詩人の交遊は徐々が増え、そこにおける作品も多くなっていた。しかし、このことが「期不至」詩における新しい試みが行われた理由の全てではない。むしろ、本稿で述べてきたように、そうした試みは、主として「期不至」詩がその特殊な題材、安定した様式によって陳腐となり、この詩の持つおもしろさ、言い換えれば詩歌としての生命力を失ってしまうことを避けるためのものであったと考えるべきであろう。

ここで一つの疑問が生じよう。それは、これらの試みを重ねても、なぜ中晩唐の詩人は「期不至」詩の創作をやめようとしなかったのか、という疑問である。

その疑問への回答として、個別的事情を含む様々な理由が考えられる。ただし、文學史的觀點から言えば、中唐に始まる詩歌の日常化・散文化はこういった「期不至」詩が作られ続けた重要な理由となるだろう。そもそも、「期不至」詩とは基本的に詩人本人と約束した相手のみが關係する、非常に個人的な詩である。そして、このような極めて個人的な關係を歌う詩が多作されるためには、それが違和感なく歌われる環境が必要とな

るだろう。その環境こそ詩歌の日常化・散文化ではなかっただろうか。つまり、約束した友人が來ないといった特殊で、それゆえに陳腐なものになりやすい題材であっても生活の一場面を描くものとして繼續して、かつ容易に歌われたと思われる。もちろん、文學全般に日常化・散文化という風潮や流行があったとしても、またかりに「約束した友人が來ない」という情況が實際に多かったとしても、論理的に言えば、それが「期不至」詩に直結するとはいえない。詩歌として結實するにはそのための様式が必要であり、「期不至」詩は盛唐期には安定した様式を確立していた。したがって、中晩唐の詩人はそれをそのまま繼承することも、受け繼ぎつつ、新たな試みを加えることも可能だったのである。

【注】

(1) 紺野達也「『友』を待つ詩人―初盛唐期の園林における詩人の交遊について―」(中國詩文研究會『中國詩文論叢』第三十集、二〇一一年二月)。

(2) 石川忠久「謝混と「遊西池」詩―東晉文學研究劄記(三)―」(櫻美林大學『櫻美林大學中國文學論叢』第八號、一九八二年三月) および「尋隱者不遇」詩の生成について」(小尾博士古稀記念事業會『小尾博士古稀記念中國學論集』(汲古書院、一九八三年一〇月))。

(3) 本稿で引用する唐詩は原則として『全唐詩』（中華書局排印本、一九六〇年四月第一版）に依據し、適宜、諸本を参照した。以下、『唐』と記す。

(4) 前掲注(1)論文二三頁では、宋之問の詩に關して「詩人が自らの遊覽の地に佛僧を招くという行爲はその場所が僧を招來するのに相應しい清澄な場であることを示すことになる」と論じる。このことは盧綸の詩の場合でも同様であると言えよう。つまり、藍溪において宗教者である蕭道士と藥を採取することを約束する行爲によって、藍溪は道士とともに訪れるにふさわしい、俗世と隔絶した場所であることが明確になっている。

(5) 宗教者と關わる「期不至」詩については、他に中唐の鮑溶「與峨眉山道士期盡日不至」(『唐』四八五)、晚唐の羅隱「期徐道者不至」(『唐』六五九)がある。ただし、これらの詩には約束した場所に關する記載が見られない。

(6) 張勇「詩僧皎然『情』論」(浙江省社會科學院『浙江學刊』二〇一一年第一期、二〇一一年)一〇三頁は「山情」という語に注目し、山情とは世俗を離れた「幽隱寂樂」の情感であると指摘する。

(7) 肖希風「論李益詩歌的意象構築」(湖南科技大學『湘潭師範學院學報(社會科學版)』第二八卷第六期、二〇〇六年一月)九一頁はこの詩に言及し、「此詩寫詩人久候友人而不至的寂寞惆悵的心情、選擇了肅・獨・暗・寒・寂・澹・虛・

中晚唐における「期不至」詩の展開(紺野)

幽等形容詞來修飾、使筆下的意象具有清幽寂靜的冷色格調、全文切合時代而又契合詩人心情、像這種表清幽之美的作品、在李益作品中還很多、從而構成李益詩歌風格又一較突出的特色」と論じる。しかし、この詩が「期不至」という様式によって歌われたことを考慮すれば、この詩の主眼は張計の不在によって生じた孤獨感や寂寥感そのものよりも、むしろその孤獨な情況で遊覽することで感得した興趣、すなわち景色の持つ清冽感、靜謐感にあるとするのがより正確であろう。なお、このような「清幽寂靜の冷色格調」が中唐という時代と符合するという點に關してはさらなる検討が必要である。

(8) 「苔井」の苔に關して、澤崎久和「王維詩「青苔」考」(福井大學國語國文學會『國語國文學』第三十號村寄健一教授退官記念號、一九九一年三月)が六朝期から中唐期までの「青苔」の表現を検討しており、六朝では「時の經過・人の不在」(二〇〇頁)、初盛唐期にはそれを踏まえて「(寺院や道館などの宗教的な)俗世間と離れた清淨な空間」(一〇一・一〇二頁)の意味を持つようになったと論じる。また井戸について、山崎藍「元稹悼亡詩「夢井」新釋——中國古代における井戸觀の側面——」(東方學會『東方學』第十六輯、二〇〇八年七月)七八頁は「故宅に残された井戸が植物に掩われているとする描寫がなされるのは、井戸は家に缺かせない道具であり、人が生活していれば井戸に植

中國詩文論叢 第三十二集

物が絡みつくことはない、という事實がある爲であろう」という。李端の詩は彼自身の山中の居宅もしくは別業を歌うことから、この「苔井」はここが俗世間から離れ、人の訪れもない場所であることを象徴するものと考えられる。

なお、末句の「掩扉」という表現はこのような推測を傍證するものとなる。紺野達也「輞川集」における王維の風景認識―「遊止」の典故を手がかりに―(早稲田大學中國文學會『中國文學研究』第二九期松浦友久博士追悼、二〇〇三年十二月)五三頁で「(王維の詩では)『門扉』が閉じられることによって、俗世間である門の外の世界を自らにとって価値ある世界から隔絶している」と論じたことがあり、李端の表現も王維のそれと軌を一にするものと判断できるからである。

- (9) 樊水園については、松浦友久編『漢詩の事典』(大修館書店、一九九九年一月第一版)「Ⅲ 名詩のふるさと(詩跡)」三三八頁「樊川(杜曲・韋曲)」(植木久行執筆)を参照。

- (10) 松浦友久・植木久行編譯『杜牧詩選』(岩波書店、二〇〇四年一月第一版)二五一頁を参照。

- (11) 何光超「杜牧の樊川情結」(湖南理工學院『雲夢學刊』第二六卷第三期、二〇〇五年五月)一〇一頁は「杜牧晩年生活の最大の閑情雅趣就在公務閒暇、與親朋故交到樊川別墅游賞聚會」と指摘する。ここで重要なのは、杜牧も公務のなかにおける休暇を過ごしていたことであろう。それゆえ

に、官界と園林の對比は鮮明になったと考えられる。

- (12) 劉學鍇・余恕誠『李商隱詩歌集解』(中華書局、一九九八年九月第一版)一八八二頁に「十字水」當爲洛郊遊賞之地」という。

- (13) 新しい試みについては、元稹が校書郎任官時に歌った「病減逢春期白二十二辛大不至十韻」(『唐』四〇五)も注目される。ただし、この詩は吏隱の問題とも關わるが予想されるので、稿を改めて論じたい。

- (14) 「友生」には「一に賈島に作る」の校注がある。

- (15) 『唐』では「夜期嘯客呂逸人不至」に作る。本稿では齊文傍『賈島集校注』(人民文學出版社、二〇〇一年一月第一版)卷九に従った。

- (16) 絶句性については、松浦友久「中國古典詩における詩型と表現機能―詩的認識の基調として―」(『中國詩歌原論―比較詩學の主題に即して―』(大修館書店、一九九六年三月第三版、初出は一九八四年)二八八―二九七頁を参照。本稿と特に關連する指摘として、「絶句本來の基本的性格は、主題に連なる關連素材が、單一的・單線的に連續してゆく点にあると言ってよい」(二八九頁)、「七言絶句に見られる輕快華麗なリズム感、詩句が終わってなおイメージの流出する余情・余韻の効果は、この詩型を、中國古典詩型のなかで、抒情感覺の直截的表出に最も適した詩型とさせることに成功した」(二九六頁)などがある。

(17) 韋應物の「同德閣」の詩は二首連作という事情もあり、純粹な短詩型の作品とはいいがたいが、それまでの律詩型式から絶句形式への轉換的・過渡的試みと考えることができると思われる。

(18) 皇甫冉には「奉和待勤照上人不至」詩(『唐』二五〇)があり、尾聯では「大臣能く法を護る、況んや故山の期有るをや」と歌うものの、他の「期不至」詩とは内容を異にすると思われ、ここでは検討しない。

(19) 園林の景觀を描く承句に見える松・竹について、二宮美那子「園林の「小空間」——白居易詩文を中心として」(日本中國學會『日本中國學會報』第六五集、二〇一三年一月)は「白居易にとって、場所に親しみ、そこを自身の居場所にするための、大切な伴侶」(九四頁)と指摘し、これらによって「園林の内部は一層充實し、外界に對抗しうる獨立性を獲得していった」(九五頁)とする。これらの松・竹の持つ機能は「期不至」詩である本詩においてより強まっていると言えよう。

(20) 陳才智「『主客圖』白派及門弟子徐凝述論」(北京聯合大學『北京聯合大學學報(人文社會科學版)』第五卷第二期、二〇〇七年六月)二二頁「徐凝・白居易交往唱和詩」表によれば、前年の大和三年から六年、特に大和三年と四年に徐凝は集中して白居易の詩に唱和している。つまり、白居易の詩に唱和することは、この時期の徐凝にとって通常の

ことであり、おそらく徐凝自身に「期不至」詩をめぐる新たな試みをあえて行おうとする自覺はなかったと思われる。徐詩の紋景が平凡なものおそれるためである。しかし、第三者による唱和という方法がこれによって開かれたことも認めざるをえない。

(21) 松原朗「友を招く姚合——姚合詩集團の形成——」(『晚唐詩の搖籃 張籍・姚合・賈島論』(專修大學出版局、二〇一二年二月第一版)、初出は二〇〇八年)一八〇頁は「武功體とは、自らの老病と貧賤を嘆き、任地の邊鄙さと職務の束縛を厭い、おのれ一人の小さな愉悅を求め、歸隱を願う文學である。それは「中央・權力・富貴」を屬性とする「官」の論理に抵抗し、舞臺の脱「官」化を實現する様式と言っても良い。……武功體の文學は、生活の直接的な反映ではなく、姚合の美學の投影として理解すべきものである」と指摘する。なお、ここで引用する詩は同「姚合の官歴と武功體」(前掲書所收、初出は二〇〇九年)二五〇・二五一頁を参照。

(22) このように同席者がいるにもかかわらず、約束した人物が來ないことを歌う詩に前掲の呂溫「夜後」詩があるものの、唱和が行われたかどうかははっきりしない。また唐末の曹松「與胡汾坐月期貫休上人不至」(『唐』七一一)もあり、「掃庭秋漏滴、接話貴忘眠。靜夜人相語、低枝鳥暗遷。星園南極定、月照斷河連。後會花宮子、應開石上禪」とい

中國詩文論叢 第三十二集

う。

(23) (陸龜蒙) 細雨輕觴玉漏終、上清詞句落吟中。松齋一夜懷
貞白、霜外空聞五粒風。

(鄭璧) 已知羽駕朝金闕、不用燒蘭望玉京。應是易遷明月
好、玉皇留看舞雙成。